

# 兒童心理學文獻抄

十三

牛 島 義 友

## 子供の考へ方

子供は小さい大人でない云ふ言葉は子供の考へ方の特色を考へる場合に最もよく當嵌まる。子供には大人と違つた彼等独自の考へ方、物の見方がある。之に就て最も深い理解をなしたものはピアジエ(Jean Piaget 1897)である。

彼はジュネーヴのルソー研究所に於て獨創的な方法で兒童の心性に就ての研究を始め、二十六歳の時に「兒童の言語と思维(一九二三年)を著して以來引きつゞき「兒童の判斷と推理」、(一九二四年)「兒童の世界觀」(一九二六年)「兒童の物的因果觀」(一九二八年)「兒童の道德意識」(一九三二年)の大著を著した。彼は現代の最も優れた獨創的な兒童研究者である。以上の諸著は既に英譯されて居り、我邦に

於ては波多野完治氏が紹介をされて居る。

波多野完治、兒童心理學 昭和六年

同 兒童の自然觀、教育科學第十册 昭和七年

彼の研究法は臨牀法と云つて居るが從來の兒童研究法は主として觀察法かテスト法でなされて居たが斯る方法では子供の心理を間接に推察する丈で子供の心に直接觸れる事は出来ない。故に彼は子供の心理に適した質問を發しそれ對する答を更に問ひつめる事によつて即ち會話法に依て彼等の心裡を知らんことを欲した。その結果は前述の書の題目にても知らるゝ如く多方面に互り、子供の心性の特色として發見し得た原理も一、二に止まらない。今此處ではピアジエの主要なる研究の一つたる左記の書を紹介する事とする。

子供のリアリズム、(實念論)

子供には内界と外界との區別が出来て居ない。心の中のものとの區別が出来る爲には自我意識が出来上つて居なければならぬが、之は子供には極く徐々にしか發達しないものである。子供には内的のものに主觀的なものはまだ存在しない。之を色々な點から説明して見よう。

一、心的のもの、物的なもの考へるさいふ働らきは吾々は純心理的な現象を考へるが子供はさうでない。シュテルンの四歳になる子供は思考を音聲を混同して人は口を舌で考へるのだと云つたさいふ事であるが、ピアジェは四歳から十六歳迄の六十名の子供に「人は何で考へますか」「考へを見たり、觸れたりする事が出来ますか」「尋ねた所、色々の答を得、而も發達的にその答が相違して居る。

第一期(七歳以下)口で考へることを云ふ時代である。或る六歳の子供は「他の動物も口で考へるが、馬は耳で考へる。何

故なら馬は人の云ふ事を耳で聞けれど物を云はぬから」を答へ、或ひは「口を閉ぢてゐて考へる事が出来ますか」に對して「出来ません」を答へてゐるが、「では口を閉ぢてお母様の事を考へて御覽。考へられますか」を尋ねるに「出来ました」を答へた。「では何で考へましたか」を問ひ詰めるに矢張「口で」を答へてゐる。故に問ひ詰めるに矛盾した事を云ふがこゝに角口で考へるものだと云つて居り、此の考へる間の違ひや矛盾には氣付いてゐない状態である。

第二期(七歳乃至十一、二歳) 頭で考へることを云ふ時代である。而し此の考へる中にもまだ前期の物質的性質が残つてゐて、「頭の中の小さな聲で考へます」を同様に「小さな口で考へます」を云つた様な事を云ひ、考へに觸れたり見たりする事は出来ないが、口から出た時には指で感ずる事が出来る、即ち聲を以て現はれて来る息を考へ、同一視して居るのである。

第三期(十一歳以後) 此の頃になるに以上の様に物質化される事がなくなつて普通の大人と同じになつて来る。

一、夢は内部のもの、外部のものとの混同を最もよく

示して居る。即ち「夢はここから来るか」、「夢を見てゐる間夢はどこにあるか」等の問ひに對し。

第一期(八歳以下)夢は外部から来るを考へてゐる。即ち夢は夜中に寢床の周りに動いてゐる、ミか夢は小さな繪であるミか、小さなラムプであるミ答へたり、或は月が送つてくれるものミか、雲ミか太陽ミか風が起すものミ考へるのが普通である。「何處にあるか」といふ問に對しては室の中、ミか自分の前ミ答へる、心理學者サリーの娘も「此の室は夢で一杯です」と同じ様に答へてゐる。併しやがて子供は夢の中の出來事が現實に起つてゐない事を知り、夢は夢幻的なものである事が判つてくる。併し尙一個の繪から成るを考へ、而も外部に在るを考へてゐる。「もし夢が頭の中にあるならば見る事が出來ないではありませんか。私が夢の中にゐるのであつて夢が私の中にあるのではない」と云ふ。

第二期(九乃至十歳)此の頃になるミ夢は頭から來る、自分の中から來るミ云ふ風に考へる。夢は吾々が何か考へる時に現はれて來る、「目醒めてゐる時は夢は頭の中にあり、寢るミ外に出て來るのだ」と云つて、空氣や煙の様なものミ考へてゐる。

第三期(十一歳以後)「夢は私の前にあつて私が何か見てゐる様であるが、併しそこには實際は何もないのです」とミ至極尤もな答をなす。

三、名前物ミその名前に就ても尙同様であつて小さい子供は未だ之を區別して居らず名前は物から生じたものであつて物を作つた人が名前も同時に作つたミ考へてゐる。十歳以上の子供であるミ、名前は私の頭にあるミか口の中にあるミか云ふが、小さい子供は物の中にあるミ答へる。例へば「太陽の名は太陽の中にある」とし、之は名前が太陽の上に書いてあるミ云ふのでなく、太陽の重要な一部分であるミしてゐるのである。「太陽は丸くて熱いから太陽ミ云ふのです」。

四、月の動き子供はおてんき様や月は子供に従つて動いて居るミ考へてゐる。四歳の子供に誰が太陽を動かしますかミ聞いた所、「私が歩く時に私が動かすのです」とミか「太陽を動かすのは私です」と云ひ、自分に太陽を動かす力があるミ信じてゐる。少し大きくなるミ子供が動かすものでは

なく、太陽や月自からがついて来るを考へる。即ち月は生きてゐて子供を守り、子供に道を教へる爲に追かけて来るを主張する。此の様に子供の感じた動きを實際の動きを混同してしまつてゐる。

以上の諸例によつて説明される様に子供は精神的のもの、物質的のもの、自分の中にあるもの、此外にあるものとの區別がなく、すべてが物的のもの、存在的のもの、考へられて居る。此の意味で子供の考へる特色はリアリズムであるを云へる。

併し此の物的を云ふ意味は唯物的をいふ意味でなく、寧ろその反對にすべてのものが生きて居る、生命のあるものを理解されてゐるのであつて、第二の特徴としてアニミズムを擧げる事が出来る。

#### 子供のアニミズム(汎心論)

子供は事物を生きてゐるもの、意識するものを考へてゐる。例へば机は生きてゐるか否か、自分のなす事を知つてゐるか、刺戟を感じる事が出来るか等を探ねるに多くは肯定的な答をする。

#### 一、生きてゐるをいふ言葉の意味

第一期(六歳以下)すべての物は生きてゐるを考へる。而も彼等は人間中心的の考へ方をして人間に役に立つものは生きてゐるを考へる。例へば太陽は光を與へるから生きて居り、風は木を動かすから生きて居り、湖水は舟を運ぶ事が出来るから生きてゐるを云ふ。

第二期(七歳迄)少しく大きくなるに動くものが生きてゐるもの、動かないものは生命のないもの、死んだものを考へる。故に太陽、月、雲、水、火、自動車、エンジンに生きてゐるものを考へるが、机、山、石は死んでゐるものを云ふ。

第三期(八歳乃至十歳迄)次には同じ動くものでも自分で動くもののみが生きて居る。他から影響されて動くものは生命のないものと區別する様になる。故に太陽、月、風は尙生きてゐるものであるが、雲、こか機械にはもう生命を認め得ない。

第四期(十一歳以上)今度は動植物のみに生命を認め、或ひは動物のみを生きてゐるものを感ずる様になつて來

る。

二、意識 之に就ても前と同じ過程を経て考へが變つて來る。例へば九歳の子供に「雲は自から動いてゐるのを知つてゐるか」を聞く「知らない、何故なら風が押してゐるから」云ふ。「では風は自から動いてゐるのを氣付くか」に對してはそれは知つてゐる。自分で吹いてゐるから」云ふ。即ち前の第三期の考へ方に應じた説明をしてゐる。又他の子供は「月は勿論自分の動いてゐる事を知つてゐます。さうでなければ毎晩歸つて來る事が出来やしない。斯く子供はすべてのものに生命を認めてゐる。

その他物の起源に就て子供はよく興味を以て質問する。太陽は誰が作ったか云々は如何して出來たか云々か尋ねるが、子供自身の答を聞く人間が作ったか考へる。或る六歳の子供は「太陽は或る偉い人が作った大きな丸い石である」を答へ、如何してそれが空の中にあるのかを尋ねた所「その人が空に投げたからだ」を答へた。即ち人が作ったか云ふ人工論をもう一つの特色として居る。

此の人間を中心とした見方は更に自分を中心とした見方

をいふ方が適切である。

例へば月が動くのは自分達が悪い事をせぬかを見守つてゐるのだを考へたり、夜になつて雲が出て來るのは子供が寝る事が出来る爲であるを考へる。即ち子供には自己中心性が他の特色であるとして居る。此の自己中心性は子供の社會生活や言語なんかに明瞭に出てゐる。例へば子供は獨言をよく云ふ。その他對手を問題としない社會的な言語は社會的言語(報告、命令、非難)に較べて割合に多い。即ち三歳から五歳位の子供には非社會的な言葉が全言語の中の五十三乃至六十%を占め、六、七歳になるに四十四乃至四十七%に減じて居る。同じく社會的言語を見てもその中に自己中心性が現はれて居る。例へば言ひ合ひをする場合彼等は「さうだ」か「さうでない」を言ふ丈でその理由を擧げる事は殆どない。即ち斯る會話に於ても單に自己を主張するに止まつて對手に納得さすまいふ事をしない。